

蘇芳集

地蔵盆

高橋 さえ子

逝く春の日向に乾く瓦焼
石鹼の罅走りたる梅雨の雷
山清水ふくみし命いとほしむ
太陽の香や凌霄のほたほたと
鳥兜手折りしゆゑの痺れかな
夕月を仰ぐ文豪旧居あと
緩る緩ると山の雲ゆく地蔵盆

ついでして

青山

丈

青梅を見に来たやうに探しだす
帰りにもこちら見てゐる羽抜鶏
顔上げてから睡蓮を離れけり
睡蓮を見たままにして帰るかな
この色となる紫陽花の当りまへ
ついでして灯して何がなしかなし
父の日の両手を上げてシャツを脱ぐ



しばらくは

小島 みつ如

初蝶の来てしばらくは猫と竹つ
葉桜やときには猫に無視されて
サボテンの花咲き過ぎて枯るるかも
緑さす漁夫の御造り見る児らへ
退職の娘はすぐ主婦に豆の飯
漁火の強き緋と青菖蒲の湯
芍薬の花束もらふ生きめやも

六月の森

清水 裕子

ランナーの足音ひたひた風光る
犬ふぐり踏まずと思ふ踏んでをり
たんぽぽや児は七色のこゑを上げ
六月の森よ路肩に土を積み
蛇苺森深ければ色を濃く
久方の家居たけの子甘く煮て
高階を泳ぎ出したる鯉幟

薔薇のころ

下平 直子

ぼうたんに音なき雨の光りけり
柿若葉少し話して気の合うて
筑波嶺のだんだん晴るる植田道
読み返す師の句集「朝」薄暑光
兄の目に吾はまだ少女青胡桃
白き皿真白に洗ふ薔薇のころ
風薫る湧水の辺に語りたし

啄木 忌

富田 正吉

赤ん坊の分も足したる桜餅
母を恋ふ師を恋ふことも春愁ひ
夕風に吹かれて来たたる恋雀
陽炎や幟を立てて来る男
読経のはじまつてゐる桜かな
母憶ふさくら沢山見し夜は
啄木忌大きな握り飯を食ふ

鮎

長沼 三津夫

窓辺の日射し

前田 陶代子

激流をなほ溯る 囀 鮎
鮎釣のよろめきて瀬を渡りけり
鮎小屋の傾きかかるランプの灯
鮎小屋の傾きて瀬にかかりけり
囀 鮎色の錆れて疲れけり
鮎宿の囲炉裏火の鮎焼きにけり
霊山の昼の暗さの鮎の宿

夏落葉

野路 斉子

夏落葉レインコートを着て掃いて
日覆か干しある物か風に鳴る
自分で髪剪つてこの夏逝かすなり
涼しさの野猫家猫一堂に
集ひ来る猫に月下の繭の花
口中に枝豆遊ぶ遊ばせて
人の灯の直下晩夏の森眠る

大皿の金の縁どり夏立てり
あり余る窓辺の日射し母の日来
花桐や遠目の利かぬとはさみし
手庇に湖照りひしと多佳子の忌
さざ波に押されてをりぬ通し鴨
人伝にふるさとのこと花卯木
夜も青葉思ひの丈を文字にして

走り梅雨

宮尾 直美

山百合の雨に香りぬ傘雨の忌
猫の近径ガーベラの揺れどほし
縁うすき父の忌日や行々子
計はつづき来るもの走り梅雨は憂し
巢燕や島のめし屋の藍暖簾
一片の雲一点の夏燕
必衰の色とは淋し水中花